ミュージアム通信

小川原脩記念美術館　☎21-4141
観覧料：一　般　500円（400円）
高校生　300円（200円）
小中学生　100円（50円）

倶知安風土館　☎22-6631
観覧料：一　般　200円（100円）
高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は 9時～17時
（入館は16時30分まで）
※（　）内は10名以上の団体料金
3月の休館日　6日・13日・20日・27日

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展　アジアの街角で」

小川原脩は晩年の大きな転換点ともいえるアジアへの旅で、中国桂林、チベット、インドのそれぞれの風物に、鮮烈な印象を受けました。小川原脩が描いた、アジアの街角で人と動物たちが繰り広げる悠々とした時間。あたたかな色彩に包まれた作品をどうぞご覧ください。

会　期：開催中～4月15日（日）

■企画展示

「くっちゃんART2018」

今年で10回目を迎える「くっちゃんART」は、倶知安町はもとよりニセコ・羊蹄山麓周辺で芸術活動に身を置く作家、さらにはそれらの作家と交流のある海外在住の作家が多様な表現による多彩な作品を持ち寄り、さらなる交流を深める、この地域ならではの国際性を反映したユニークな展覧会です。小さな美術館で、多くの作家が集う、賑やかな展覧会を開催します。

会　期：開催中～4月15日（日）

アート・イベントのお知らせ

■アート・シネマ館

「カラヴァッジオ」1986年/93分/イギリス（字幕）

ルネサンス末期に生きた異端の画家カラヴァッジオの生涯をモデルに、英国が誇る異才デレック・ジャーマンが描くアート映画。カラヴァッジオの精神と作品が艶やかによみがえります。

日　時：3月3日（土）14時～15時40分
お話し：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

「おしゃれ泥棒」1966年/124分/アメリカ（字幕）

美術愛好家でコレクターのシャルル、実は天才贋作（がんさく）画家。その娘を演じるオードリー・ヘップバーンがパリの街を舞台に見せる、華麗な盗みと愛のテクニックをお楽しみください。

日　時：3月31日（土）14時～16時10分
お話し：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

■土曜サロン

アート・トーク「くっちゃんART2018」

「くっちゃんアート」も今回で10回目を迎えます。当館スタッフが、展覧会および出品作品などについて、それぞれの視点からご紹介します。

日　時：①3月10日（土）14時～14時30分　お話し：沼田絵美（当館学芸員）
②3月24日（土）14時～14時30分　お話し：柴　勤（当館館長）
会　場：当館映像ルーム（無料）

アート探訪〈みて☆きいて〉12「ユトリロ～悲しみの白」

ユトリロの白は何処から来たのか。幼いころからアルコール中毒におかされていた少年を大画家にまでさせたものは何だったのか。哀愁漂うパリの裏街を描いたユトリロの「白」を探ります。

日　時：3月17日（土）14時～15時
講　師：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

美術館を楽しもう！

隠れ家的美術館、と言っては失礼でしょうか。ですが、札幌の街中にありながら、知る人は極めて少ないようなのです。実は私もその一人でした。この豊平区にある3階建ての「HOKUBU記念絵画館」は、美術館というより立派な住宅の趣き。玄関横の居間を思わせる展示室では、洒落た家具に加え、何と飲み物やお菓子まで用意されているのです。さらに2階、3階のワンフロアーの展示室には、座りご心地の良いソファや素敵なフロアースタンドが随所に配置され、ちょっと広いお宅にお邪魔したような居心地の良さがあります。現在、当館とも関係の深い米澤邦子さんの作品25点を展示中。私も静かな空間でじっくりと米澤ワールドに浸ってきました。

館　長　柴　勤（つとむ）

感動一点の場

『たくらみ』
1970年　小川原　脩　画

次なる犬の登場は、1970年になってからである。「農民達」（1942年）以来、50年代、60年代には圧倒的に馬の作品が多い。その色彩も、濃厚な赤の画面から、1970年を境にして青色の世界へと変わる。

本作品は、全体に青く染まった中、舞台の上で道化の衣装を着た二人の男が何かやりとりをしている。題名の「たくらみ」からすると、良くない事をこそこそと打ち合わせしている場面なのか。そして、白い犬が手前に顔をのぞかせている。見開かれた青い目、ピンと立てられた耳。全神経を集中して、真偽をたしかめるように向けられた視線は、とても人間味のある表情だ。

これはなんとも奇妙な組み合わせ。この奇妙さが、見る人の心にさまざまなストーリーを抱かせる、面白い作品である。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

419回

―ひな人形のはじまり―

今日は楽しいひな祭り～♪ 3月3日は桃の節句、ひな祭り。ひな壇に人形を飾り、女の子の健やかな成長を願う華やかなお祭り。風土館にはいくつかのひな人形が保管されているが、中には昭和10年より前に作られたとされている古いものもある。では、ひな人形はいつ頃誕生したのだろう。

▲風土館一階に展示中のひな人形（3月3日まで）

ひな人形の原形は、奈良～平安時代に行われはじめた「流しびな」だとされているが、その姿は現在のものとはだいぶ異なっていた。もとは人の形をかたどった「ヒトガタ」といわれる紙製の人形で、身に降りかかる災いやケガレを代わりに引き受けてもらう、いわば身代わりの役割を担っていた。平安時代の小説「源氏物語」でも、光源氏が都から離れた地でヒトガタを乗せた舟を海に流してお祓いをするシーンがあり、ここからも長い歴史と役割の重要性が感じられる。やがて、基本的に使い捨てだったヒトガタに代わって、立ち姿の「立ちびな」などが生まれた。厄払いの役割のほか、女の子のおもちゃとしても親しまれるようになり、捨てずに繰り返し使われるようになって作りも立派になった。内裏びなに姿を変え、右大臣・左大臣、左近桜・右近橘、三人官女・五人囃子が加わって、江戸時代後期、現在のような姿になった。女の子の健やかな成長を願う行事として定着したのもこの頃。

「ひな人形を早く片付けないと婚期を逃す」という話もあるが、これはどうやら「早く片付けないと払った厄が戻ってきてしまうよ」ということからしい。少しずつ姿を変えてきたひな人形だが、厄を払って日々を健やかに過ごせるようにと込められた人々の思いは昔から変わらずにあり続けている。

文：小田桐　亮（倶知安風土館　学芸員）